

第2章 アルコールを物質として理解する

扉のことば (八田 慎一)

アルコールによって生じる生体の変化には、健康にとって有益な場合と、障害などのような有害な場合とがある。いずれにしても、このような変化は化学物質としてのアルコールが細胞に及ぼす影響の結果として生じる。アルコールは親水性と疎水性という2つの化学的特性を持つ有機溶媒の一種であり、特異的な結合能を示す蛋白質がないことから細胞の様々な蛋白質や脂質などに対して直接的あるいは間接的に作用し、その機能を変化させる。この章では、アルコールの生体への影響を理解する基盤として、アルコールが細胞機能をどのように変化させるのか、その機序に関する報告を中心に掲載した。

この章の内容

- I. 有益な作用をもたらす物質としてのアルコール (論文番号82~118)
 - 血液凝固・線溶系への影響 (論文番号82~87)
 - 抗酸化作用・抗炎症作用 (論文番号88~98)
 - 心筋保護作用・抗圧作用 (論文番号99~105)
 - 抗アレルギー作用 (論文番号106)
 - 抗癌作用 (論文番号107~109)
 - その他 (論文番号110~118)
- II. 有害な作用をもたらす物質としてのアルコール (論文番号119~149)
 - 胎児 (論文番号119~124)
 - 肝 (論文番号125~133)
 - 循環器・呼吸器 (論文番号134~136)
 - 腎 (論文番号137)
 - 消化器 (論文番号138~142)
 - 神経・内分泌 (論文番号143~149)
- III. アルコールに関連して作用する物質 (論文番号150~157)
- IV. アルコールおよび関連物質の作用機序 (論文番号158~190)

八田 慎一

1975年北海道大学薬学部卒業、札幌医科大学医学部薬理学講座助手、米国イリノイ州立大学を経て、札幌医科大学医学部薬理学講座助教授。主たる研究分野は中枢細胞情報伝達系の調節機序について。